

洋書とハヤシライス

ここ数年、正月の最初の外出先はほとんど書店、最初の買物はその時に目についた本だった。

去年の暮、四丁目十字街にあった書店「富貴堂」が消えた。あの店はかつて札幌の文化の中心でもあった。戦前の札幌を偲ぶよすがとして、例えば“絵葉書”が貴重な資料として図書館などに僅かに残っているが、その発行元は富貴堂だ。この店は札幌の歴史の伝達者でもあったわけだ。

今の札幌は郊外に大型店が数多く増えた。わざわざ都心まで行かなくても、かなり多様な本が手に入る。富貴堂は郊外型書店の波にのみ込まれたのかもしれない。

とはいえ、郊外大型店のいささかの弱点はたぶん専門書の不足だろう。洋書や学術書となるとどうしてもここでは無理のようだ。

戦後間もない十代の頃、洋書の棚の前へ来ると胸がときめいたものだった。分厚いハードカバーの本を恐る恐る開いて、びっしりと並んだ横文字の列とインクの匂いに圧倒され、また、豊満な女性の絵が表紙になっているアメリカ製の小説本の中身を勝手に想像したりもした。医学書や工学書など自分と全く縁のない書籍の棚の前に立って、ちょっと思慮深げなポーズを取ってみたり、とにかく格好だけ知的雰囲気の中に身を置いて、それでけっこう満足していた。幼稚な街気ばかりが先走っていた年代があったことを富貴堂の撤退が思い出させてくれた。

今、そんな子供っぽい郷愁を引き出してくれる書店があるとすれば、富貴堂真向い同じ四丁目十字街の書店丸善だろうか。店の宣伝をするわけではないが、洋書といえば丸善、日本を代表する老舗である。創業者はたしか早矢仕有的という方で福沢諭吉の弟子だったのではなかったか。明治の初頭の創業であり、当時の知識人文化人が集まるサロンの意味あいもあったようだ。この辺は札幌における富貴堂と類似している。(といっても丸善が本家だろうが)

この早矢仕さん、来客があると簡易な洋風料理を作ってもてなした。客はそれをハヤシライスと呼んだ。カレーライス・オムライスと並ぶ洋食ライスご三家の発祥であり、今も丸善地下の喫茶店のメニューにある。文明開化の味である。このハヤシライスが今年最初の私の外食にもなった。